

第六章 裁判

突然誰かが「裁判が始まるぞ！ 裁判が始まるぞ！」と叫びます。

「裁判ですって？」とアリスは尋ねます。

「それは誰の裁判なの？」

でも誰もアリスに答えてくれません。

ほどなくしてアリスは法廷にいます。

ハートの王と女王が玉座に座っています。

ハートのジャックが彼らの前に立っています。

法廷にはたくさんの鳥、動物やトランプたちが座っています。

中央には、タルトを盛った大きなお皿を乗せたテーブルがあります。

白ウサギが彼の手に長い1枚の紙を持って、王のそばにいます。

彼は読み始めます：

「ハートの女王、彼女はタルトを作る、

ある夏の日のことである。

しかし、ハートのジャック、

…彼がそのタルトを持ち去ってしまうのだ！」

「やつの頭を切り落とせ！」と女王が叫びます。

「いや、いや！」と白ウサギが言います。

「われわれはまず、何人かの証人たちの話を聞かねばなりません」

「よかろう」と王が言います。

「最初の証人を呼びたまえ」

最初の証人は帽子屋です。

彼は片方の手にティーカップ、もう片方の手にはバター付きのパンを持っています。

「これについては申し訳ないのですが、私のお茶の時間なのです」と帽子屋は言います。

「おお、まことか？」と王が言います。

「そなたの帽子を脱ぎたまえ！」

「私のではないのですよ」と帽子屋が言います。

「では、それは誰の帽子なのだ？」と王は怒って尋ねます。

「私には分かりません」と帽子屋が言います。

「私は帽子を売っているんですよ」

「そなたの知っていることを私に話すのだ」と王が言います。

「ああ、私は何も知らないのです」と帽子屋は言います。

女王は眼鏡を掛けて、帽子屋を見ます。

帽子屋は女王を怖がって、顔が真っ青です。

彼はバター付きパンの代わりに、ティーカップの一片をかじります。

「私はただの貧しい男です…」と悲しげに帽子屋は言います。

「どうか私を行かせてください、そして紅茶を飲み終えさせてくださいませ」

「よろしい、そなたは行ってもよいぞ」と王は言います。

「外でやつの頭を切るのだ」と女王は兵隊の一人に言います。

しかし帽子屋はあっという間に逃げ去り、誰も彼を捕まえることができません。

不意にアリスは妙な感じに襲われます。

「あらやだ」と彼女は思います、「私また大きくなっていったる」

「次の証人を呼びたまえ」と王が叫びます。

次の証人は公爵夫人の料理人です。
彼女が大きなコショウ瓶を持って法廷の中へ入って来ると、皆がくしゃみをします。
「そなたの知っている全てを私に言うのだ」と王が言います。
「いいえ！」と料理人が言います。
王は驚いて、白ウサギを見ます。
「証人に質問をしてください、陛下」と白ウサギは落ち着いて言います。
「おお、その通りだ」と王は言います。
「タルトは何でできておる？」
「それらはコショウでできております」と料理人は答えます。
「砂糖でできているんだよ」と眠りヤマネが言います。
「何だと！」と女王が言います。
「そのヤマネを追っ払うのだ。そいつの頭を切り落としてしまえ！」
法廷内はずいぶん騒がしきで、ようやくヤマネは立ち去ります。
「次の証人を呼びたまえ」と王が言います。
白ウサギは長い紙を眺め、そして「アリス！」と言います。
アリスはとても驚きます。
アリスは今ではもうかなり大きくなっています。
アリスがさっと立ち上がると、何匹かの鳥や動物たちが転げ落ちてしまいます。
「まあ」とアリスが言います、「本当にごめんなさい！」
そしてアリスは進んで行き、王と女王の前に立ちます。
「そなたはこのことについて何を知っているのだ？」と王が尋ねます。
「何も」とアリスは答えます。
「それは非常に重要だ」と王は言います。
「非重要ということですね、陛下」と白ウサギが言います。
「もちろんだ」と王が言います、「つまり…非重要だ」
そして王は本に何か書きます。